

アルミ建材における工場塗装の 現状と市場展開

アルミニウム合金材料工場塗装工業会 (ABA)

専務理事 近藤 旭

——アルミ建材が脚光を浴びて業界が活発化している中で、ABAも含めて業界がどのように変遷してきたのか、最近はどんな活動をしているのか、アルミ建材は今どういうところに使われているのか、そういうところを専務理事にお伺いします。

ビルの高層化に伴い、軽金属であるアルミは増えてきました。最近では100mを超える超高層も珍しくなく、アルミのカーテンウォールは昔は多くありました。ただ、ガラスカーテンウォールの出現に伴い、高層ビルでのアルミの使用はガラス用のサッシと低層の天井・壁パネルに限定されるようになったと思います。

しかしながら、最近では単にガラスカーテンウォールの壁にするだけでなく、縦や横、場合によってナナメにアルミの化粧材をつけて、デザインの差別化を図るようになったと思います。このようなものは設計者の関心も高く、塗装の品質にもこだわりを持つ人も多い。そういった意味で、ABA会員が活躍できる場はまだまだ少なくないと思います。

工業会も2014年に始まってはや6年、最近では各地で勉強会を重ね、認知度も広まってきました。ABAもそういう意味では少し広がって会員も増やしているんですけど、塗装会社である正会員は現状20社、メーカーや販売会社の賛助会員が16社です。創業時に比べて正会員は3社増え、賛助会員は4社増えました。残念ながら2社退めた企業もありますが。

昨年の活動としてはABA有志企業による工

場見学会で、マルシン、ダイワ、大塚金属、筒井工業、戸崎産業の5社から、30歳前後くらいの若手社員をそれぞれ交流という形で参加させました。それと同時に、去年はまだコロナがなかったので懇親会も開催しました。

そういう意味では会員企業同士の交流も多くなりましたし、工業会のさまざまな活動が皆さんのお役に立っているのかとは思っています。その一方で、工場見学会を行った時も、やはり同業でライバル同士ですから、工場内や塗装のノウハウを見せたくないという気持ちも多少は感じました。5社のみがやりますと言って、ほかはやらない。工場見学会などの視察活動は、なかなか難しいと感じています。

ただ、逆風に負けず継続すれば、同調してくれる会社も出てくるはずと思い、今年も実施したいとは思っていましたが……。2月の理事会までは開催しましたが、その後、新型コロナウイルスの感染者を乗せたフェリーが寄港してまもなくのころ、今後の活動は大丈夫だろうかという雰囲気になり、3月になって世の中の流れが変わり、それからは総会の開催までが中止になりました。今年度の理事会で決めたさまざまな計画がほぼ実施できない状況になりました。

そういった意味では会員をつなぎ止めるのもなかなか難しいなと思ってはいたんですけど、ABA認定工場塗装管理技術者の認定制度がようやく目処(めど)がつかしました。

——2年前にその話がありましたね。

その制度がようやく出来上がり、テキストは

すでに完成しています。現在は試験問題を作成しており、来年2月ころの実施予定です。ただ、来年2月に実施したいとは思いますが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から試験会場に目一杯に受験者を詰め込んで密な状態で一箇所の会場で実施するというわけにもいかないのです。東京、名古屋、大阪の三会場で実施することとしました。コロナ対策のためあらかじめ受験者数の確認をしたところ、1会員当たり5～10人が受験するとの意向があり、この制度にはある程度高い関心が寄せられているのかなと感じています。

溶剤系仕様書や粉体塗装指針の中で、塗装管理技術者および塗装技能者に向けた試験づくりをABAにお願いしたいという形で記載がありましたので、それがようやく塗装管理技術者認定制度という形で実現できたのかなと思っています。

——これは大きな一歩ですよ。

塗装技能士検定を工塗連などさまざまな業界団体で行っていますが、建築が中心のわれわれ会員企業にとっては幅が広すぎて受験するニーズがあまりありません。範囲が広すぎて受からない。結構マニアックなんですね。

今回のわれわれの認定制度は、技能士ではなく塗装管理技術者という形で、建築分野にある程度特化した中での品質管理や業界動向について試験する制度がようやく出来上がるということで、物は試しに受けてみようという会員の皆さんが関心を示してくれているのだらうと思います。技能者は既存の資格もあるうえに、コロナが落ち着くまでやってもすぐできないところとか、まあ技術者のほうもなかなか大変な作業だったので、1回くらい試験をして感想を聞いてみて、たぶん修正が入ったりそういうのがあるので、少し落ち着いてから技能者のほうは考えようかなと思っています。そういう意味で、第一歩的にできて良かったのかなと思います。

——これはどなたが関(かか)わっているのですか。

ものづくり大学名誉教授の近藤照夫先生がずっと顧問でやってくれて、最終編集とか構成を近藤先生にお願いしました。委員長は筒井工業の前島靖浩さん、私が総務系の幹事で、大塚

金属の大塚明郎さん、日本電気化学工業所の長谷川太一さん、塗料メーカーからトウペの近藤豊三さん、大日本塗料の渡部直康さんに集まっていたいただき、試験のテキストを試行錯誤しながら作成し、試験の講義もテキストを作成した人がその分野を説明します。

1章が前章として今、塗装がどんな環境に置かれているか、その中で塗装管理技術者がどういう役割を果たすべきかを近藤先生が書いて、2章はメーカーとコーターが中心になって塗料と塗装のガイド。3章は建築概論という形で素材や建築、要は家とかビルがどういった造りで建てられているか。4章がマネジメント。管理技術者なので、中間管理職や経営者目線で、マネジメントという観点でさまざまなマネジメント手法とかISOとかの話を入れたりしています。

最終的には工業会の会員だけではなく、業界のたとえばゼネコンだったり、サッシメーカーの技術者の人たちにも塗装の管理ってこういう形になってるんだよというのを受けてもらいたいという希望をベースにつくったところがあるので、そういう意味では建材業界に一石を投じたいと……。

——塗装管理技術者の資格を取得した時に、どういうメリットがあるのですか。

それは、これから詳細を決めていく必要がありますが、会員会社には資格を持つことによって、たとえば給与アップによる個人的なマインド設定、モチベーション向上を狙(ねら)って個々の会社で制度化をお願いする話が出ています。このようなコンセプトのもとに資格取得制度をつくろうという話がそもそもあったわけじゃないんです。

われわれが最初に考えたのがJISとかQUALICOATもそうですし、IPCO((一社)国際工業塗装高度化推進会議)グッドコート規格をつくろうとしています。同様のものがABA認定でできないかと考えました。ただ最初に考えた時に、JISの認定工場がすごくハードルが高かったり、それをずっとひたすら管理し続けることとか、工場を審査するのに工場の何が適切なのか本当にライバル同士で審査できるのかという根本にぶつかり、それが立ち塞(ふさ)がってしまいました……。

そこで、それより個人を啓蒙(けいもう)することによってレベルの底上げをしようと切り替えました。われわれのアルミ建材では仕上学会がつくった溶剤系仕様書や粉体指針が正なんだというところを、自分の会社に当てはめた時に、自分の会社に何が足りないのかを積極的に勉強できる土台をつくるような試験を目指しています。で、これを取得していることによって、認定工場ではないですけど、建材を発注する会社などが安心して、こんな勉強している人たちが会社にいっぱいいるんだというところを伝えたい。たとえば、対外的にゼネコンと話をした時に名刺を見て、工場塗装管理技術者って何と言われた時に、学会で編集された塗装仕様を遵守するためにつくられた、一種の秤(はかり)になっているような個人の資格ですよ、だから安心して自分の会社を使ってください、僕に質問してくださいみたいな、業界の安心材料みたいなところだと思います。

工業会としてはわれわれの業界はお互いのライバル心や警戒心が強い中で、知識が自己の会社で固まりがちである若い人たちをどうやって育てていくか、また、塗装業界の団体としてどうやって会員を代表して建築・建材業界に売っていくかということを考えないといけない。そういう中で現在、ちょっと心配しているのは、粉体塗装なんですけどね。

世間や学会、そしてABAの目指す環境仕様の中で、粉体とクロムフリーという二大看板があるんですけど、クロムフリーに関しては徐々に会員の中でも広がっています。もちろん粉体というのも、大きな市場で見れば広がっているのは事実ですけども、このところ建材とか建築のところではもう少し凹(へこ)んでるなという印象を持っています。みんなが使い続けてたいぶ経ち、粉体に対する認識は広がってきました。しかし、使用中でデメリットばかりが強調され、たとえば納期の問題とかロットの問題で使用量が落ちているというのは2年前からずっと変わってなくて、2年前よりさらに悪くなっているのかとも感じますね……。

ただ、ここへ来て大きな会社が、仮にX社としましょう、X社は商品としてビル建材の特注品だけでなく、家庭用の在庫のカタログ品のような製品を売っています。そういったもので



今まで溶剤でやっていたのをガラッと粉体に変えるというのは増えてきていると思います。ただ、特注品に粉体という動き——アルミ建材の特注品に粉体という動きは少し弱まっているのは事実かなという気がします。

ただオフィスビルでも内部に関しては、粉体は増えている気がします。オフィスビルだと上から下までずっと設計が一緒なんですね。そういう製品だと海外発注しやすいので、そういうのが今まで溶剤だったのが粉体になってきているところがあります。あくまで海外に行くケースが多くて、国内の粉体を喚起するのはちょっと弱いのかなとも思っています。

——業界の景気動向については、どのようにご覧になっていますか。

やっぱりコロナの影響とか少なからずあって、需要が落ちているというのはここ直近急激に実感しています。会員の中には意外と伸びている分野をユーザーに持っていて好調だよという会社もあります。大半7,8割くらいはダメだと言ってんですけどね。1,2割くらいはオレの業界は大丈夫だよと。

弊社(マルシン)の話ですがまだ正式には公表していませんが、設備投資としてはクロムフリーの前処理設備の導入が完了しましたので、これから本格稼働に向けていろんな薬液を入れて、いろんな試験をして、徐々に使っていくって正式に羽ばたくのが2022年。それが前になるのか後になるのかは今後の試験とか進み具合とかによるんだと思いますけど。理工出版社はベストなタイミングで取材に来ましたね(笑)。

——近藤専務理事にお話を伺いました。ABAの今後に関心しているところですね。